

「平成24年度博士課程教育リーディングプログラム委員会（第1回）」議事要録

1. 日 時：平成24年3月9日（金）15：30～17：30
2. 場 所：ホテルニューオータニ ガーデンコート5階 シリウス
3. 出席者：（委員）有信委員、安西委員、猪口委員、内堀委員、笠木委員、金子委員、鎌田委員、岸委員、桐野委員、窪田委員、佐藤委員、橋本委員、八田委員、林委員、松本委員、室伏委員、吉野委員、米澤委員
（文部科学省）板東高等教育局長、池田大学振興課長、樋口大学改革推進室長
（事務局）戸渡理事、小山内研究事業部長、長澤研究事業課長、有菌研究事業課長代理

4. 議事要録

（1）平成24年度公募要領・審査要項等について

- ・平成24年度「博士課程教育リーディングプログラム」公募要領（案）〔資料2〕について、文部科学省より説明があり、平成24年度「博士課程教育リーディングプログラム」計画調書等（案）〔資料3〕、平成24年度「博士課程教育リーディングプログラム」計画調書等作成・記入要領（案）〔資料4〕、平成24年度「博士課程教育リーディングプログラム」審査要項（案）〔資料5〕、平成24年度「博士課程教育リーディングプログラム」審査基準（案）〔資料6〕、平成24年度「博士課程教育リーディングプログラム」ヒアリング実施要領（案）〔資料7〕、平成24年度博士課程教育リーディングプログラム審査・評価スケジュール（案）〔資料8〕について、事務局より説明があり、その後、質疑応答が行われた。本日の意見を踏まえ、資料の一部について修正することとなった。委員からの意見は以下のとおり。

- 昨年度は、俯瞰的に物を見ることができ、本当に国際的なリーダーになれる人材を育成するという本プログラムの趣旨が必ずしも浸透していないのではという議論もあった。来年度の公募に際しては、事業の人材育成という趣旨をうまく強調すべき。
- 大学の現状はそれぞれの専攻等々、分野がある意味、縦割りになっていて、それを本当に総合して、俯瞰的に、また答えのない問題に対して、あるいはグローバルなイシューに対して立ち向かっていけるようなリーダーシップを持った人材を大学が育てていけるのかということについては、フォローアップも含めてバックアップしていかなければならない。
- 本プログラムは、大学改革のためのプログラムであり、実際に制度改革を必要とする内容の申請が多い。学位記にプログラム名称等を付記するのみではなく、プログラムとして新しい学位を付与する等、学位を審査する部局間の横の繋がりを確認し、継続性を担保するような仕組みを求めるべきではないか。
- 審査に当たっての着目点において、継続性ということはあまりはっきり書かれていない。継続性はこの手のプログラムとしては非常に重要。身を削ってでもこれ続けるということを大学に当初から意思表示していただかなくてはいけない。また、国としても大学改革のために継続性を担保するという視点が必要。
- 本プログラムはあくまでシステム改革というか、大学院の新しい形というか、今の大学院のままではとても国際的に通用しないし、日本の将来にとっても非

常に大問題であるから、これを変えていきたいということなので、この継続性はどこかできちんと保たなければならない。

- 公募要領の申請要件の「或いは」に続き、「既存の専攻分野の名称を用いつつ学位記に当該学位プログラムの名称を付記するよう」とあるが、学位記で付記だけしてあるとプログラムがなくなると付記もなくなるということにならないように指導した方が教育改革に繋がる。
- 審査に当たっての着目点の一つとして、「学位プログラムに関する専攻等の組織は国際レベルで優れた教育研究拠点としての実績を有しているか」が掲げられているが、新専攻での申請の場合は、実績が存在しないことから、内容的にユニークな申請にも配慮が必要ではないか。
- 平成23年度に採択されたプログラムは模範となり得るが、実績だけでなく多様性やプログラムの創意工夫を考慮した審査を実施することが重要である。
- 申請する類型やテーマ領域の選択が適切でないと思われる申請があり、予算規模で申請類型等を選択しているように見受けられるものがあつた。
- 全ての類型やテーマ領域で全く同じ基準で審査するのではなく、もう少しカテゴリー毎に違いがあってもよいのではないか。
- 申請段階で事業の主旨を十分に理解していない大学が見受けられた。

(2) 平成23年度採択プログラムに係るフォローアップについて

- ・平成23年度採択プログラムに係るフォローアップについて、博士課程教育リーディングプログラムのフォローアップについて(案)[資料9]について、事務局より説明があり、その後、質疑応答が行われた。本日の意見を踏まえ、資料の一部について修正することとなった。委員からの意見は以下のとおり。

- 本プログラムは人材養成プログラムであり、学生の支援に影響が出ることより、フォローアップによって補助金額を増減するのではなく、よいプログラムを大学と委員会ですっかりと作り上げていく、という視点が重要であり、一方的に評価するという立場だけになるべきではない。
- 本プログラムは教育・人材育成プログラムである。教育というものはもともと持っているものを引き出す努力である。卒業生が出て、実社会での活躍も見る必要がある。毎年のように進捗状況を見て評価をし、駄目だったら減額することがあるという書き方は、非常に不適切である。
- フォローアップというものは、そのプログラムを成功させるためのものである。成功させるための努力をすべきである。
- プロパーのPOも必要。
- プログラムの中での学生への教育の仕方、教え方等の抽象的な良い面もフォローアップなどで見つけるようになると有益である。
- フォローアップ報告書等は、今後の大学院の方向性を示すものとして、他大学の参考となるように発信することが重要である。また、プログラムの意義を一般社会にも宣伝すべきである。
- プログラムにより育成された人材の社会に出た後の評価が重要であり、受入れ機関への聴取も必要。
- フォローアップの際に必要な書類の作成や手続き等が申請者に過大な負担とならないよう工夫する必要がある。

(3) 専門委員等の選考等について

- ・専門委員の選考について、博士課程教育リーディングプログラム委員会専門委員の選考について〔資料10〕に基づき、事務局より説明があり、了承された。また、類型別審査・評価部会長の指名が委員長より行われた。

(4) その他

- ・次回の委員会は、部会における審査終了後に開催することとした。